かごしまの本格焼酎の未来

～かごしま焼酎大使・林棟甫（リンドンフ）氏と県酒造組合会長・濵田雄一郎氏によるトークショー～

当協会では、本県本格焼酎の海外への輸出促進を図るため、平成30年4月18日に、かごしま焼酎大使に委嘱された中国の俳優・林棟甫（リンドンフ）氏を招いて『かごしま焼酎の未来』をテーマにトークショーを開催しました。

林棟甫氏（写真左）と濵田 雄一郎氏（写真右）

県産品の輸出へ向けた取り組み

当協会では、県から委託を受け、これまで中国へ県産品の販路拡大へ向けて様々な取り組みを行ってきました。平成8年から中国・上海にて、物産観光展やフェア、商談会などを開催。さらに、平成14年、中国東方航空の鹿児島・上海線が就航したことも契機となり、平成22年には、鹿児島県特産品協会上海代表所（上海事務所）を開設しました。平成30年5月現在、焼酎のほか、農・水産加工品など約200品目が中国で取引されています。

原料となるサツマイモやサトウキビの生産・加工から出荷まで、雇用の場として裾野が広い重要な地場産業である焼酎産業。しかし、国内では人口減少などの理由から、消費は減少するものと見込まれているのが現状です。そのような中、酒造メーカーでは海外への輸出に取り組む動きが活発化しており、特に、本県の本格焼酎の最大輸出先である中国に向けての活動は今後もますます拡大すると考えられています。

「かごしま焼酎大使」に林棟甫（リンドンフ）氏を委嘱

林棟甫氏は、邦画の吹き替えなどで活躍する中国で最も著名な声優でありながら、テレビ番組司会やドラマ・映画へも数多く出演するなど、各界で活躍されています。

「かごしま焼酎大使」は、本県の本格焼酎の海外における認知度向上、消費拡大などを図ることを目的とし、本格焼酎に関心と深い愛着と造詣を持ち、海外において本格焼酎の魅力を発信する意欲と機会を有する方に県知事が委嘱しています。林氏は数年前に本県の焼酎に出合って以来、焼酎をこよなく愛し、各国・各界の友人・知人に広くPRを努めていることから、大使への委嘱が決まりました。

濵田雄一郎県酒造組合会長との意見交換会

―鹿児島焼酎との出合いはいつ頃でしたか。

林氏（以下、林） 6年前、在上海日本国総領事館に招待され、参加した会が焼酎との初めての出会いです。焼酎を一口飲んだ時、美味しいと思うよりも前に、「私は焼酎一筋になる」と確信するほど一瞬で心を掴まれました。

―林さんにとって、焼酎の魅力とはなんですか。

林 一言で伝えることはとても難しいですが、まずは一口飲むと広がるフルーティーでありながらたまに花のような香りがする、優雅な風味ではないでしょうか。また、味わっていると、焼酎の原料である芋の生産地の空気や日差しを感じたり、生産者への興味が湧いてしまうほど深みがあることも魅力です。

―鹿児島県の本格焼酎の現状を教えてください。

濵田氏（以下、濵田） 197

0年代、鹿児島を皮切りに焼酎ブームが起こり、その後、米やそば、麦を使った焼酎が全国各地で生産され、ますますブームを加速させることとなりました。2005~6年には鹿児島のみならず全国的にもピークを迎えましたが、それから12年経った現在、本県はピーク時の70%ほどに出荷量が減少しており、全国平均を下回っている状況です。本県の芋焼酎の出荷量は落ちていないものの、黒糖焼酎が落ちており、また隣県・宮崎の芋焼酎が数を伸ばしていることが、本県の焼酎業界が低下している要因だと考えられます。

また、「本格焼酎」というカテゴリの世界的認知は極めて不十分で、輸出規模も年間10数億円と輸出産業としては発展途上です。一方、世界のマーケットに目を向けると巨大な酒のマーケットが存在するので、ここを開拓していけば無限の可能性が秘められていると感じています。

―中国での需要拡大に向けて、鹿児島県に期待することはありますか。

林　上海では焼酎に出会える人はそう多くいません。その理由は、上海で日本料理を嗜むのは身分の高い人という考えがあることと、お酒は大衆的な飲み物ですが、焼酎は日本人が飲むものという認識があるからだと考えます。また、残念なことに中国人が経営する日本料理店には日本酒が並べられていることがほとんどで、焼酎を見かけることはありません。

もう一点、中国には一昔前、裕福でない家庭で作られていた〝土焼酎〟というお酒があり、焼酎と聞くと高級でないものというイメージを抱く人が多いと感じています。「鹿児島焼酎」という名前を変える必要はありませんが、言語の異なる地域の概念を変える必要があります。そのためには、説明の仕方を変えて、皆が分かりやすく理解できるようにすることが中国での需要拡大に向けて取り組むべきことだと思います。

―県酒造組合として今後どのような取り組みを考えられていますか。

濵田　日本の蒸溜酒として、国酒として焼酎は全国に普及されてきましたが、日本のマーケットは少子高齢化、人口減の時代を迎え、国際マーケットを意識せざるを得なくなりました。海外に目を向ける時にもっとも身近で巨大なマーケットである中国の存在は無視できません。その中国を代表する知識人の林さんが焼酎を評価してくださっている一方で、マーケティングはまだまだということを教えて頂きました。海外への意識が薄い焼酎業界の我々に何が欠けているのかというヒントが林さんのお話の中に随所に隠されていたので、参考にしていきたいです。

トークショー後に行われた交流会の様子

―かごしま焼酎大使としての抱負を聞かせてください。

林　まずは皆と焼酎をシェアして楽しむことが大切な活動だと思います。焼酎をPRする上でやるべきことはたくさんありますが、鹿児島焼酎の良さは一度飲めば必ず分かってもらえると感じているからこそです。また、上海で経営しているジャズバーでいつか鹿児島焼酎の品評会などもしてみたいと考えています。そして、500年もの歴史を持つ焼酎について、これからも学び続け知識を深めていきたいです。

林氏への期待膨らむ

6月22日に開催された当協会通常総会の懇親会にて、三反園訓鹿児島県知事（理事長）より、林氏が上海市内に焼酎クラブ「Jazz jn Shochu」を8月にオープンさせることが発表されました。鹿児島と中国、そして焼酎と世界の架け橋として、今後も林氏の活躍に期待が膨らみます。